

一人親ヘルパーからみた児童虐待

—— 表面化する虐待と表面化しない虐待 ——

湯野川 礼

I. 問題の所在と研究目的

近年、児童虐待が深刻な社会問題として捉えられている。全国における児童相談所対応件数は、平成17年度で34,472、平成18年度では37,343と増加を辿っており¹⁾、児童相談所は被虐待児童の対応に迫られている。その対処として、あるいは防止として地域における児童虐待への対策が講じられている。また、少し古いデータではあるが、平成10年に報告された児童虐待の内訳は、身体的虐待3,673件、心理的虐待が650件、性的虐待は369件、ネグレクトが2,109件となっており、ネグレクトは少ないが、性的虐待はほぼその半数であり、他と比べて件数の少ない、あるいは出てこない虐待であるといえる。市町村のケースワーカーが、虐待の起こりそうな家であるリスク家庭をチェックし、児童虐待の事前の策として、ヘルパー事業所に依頼し、ヘルパーの派遣をおこなっているところもある。リスク家庭の定義は様々であるが、本稿でいうリスク家庭とは、主に児童虐待行政が児童虐待が発生しそうだとみなす一人親家庭に限定する。行政は、一人親家庭を未だ“欠損家庭”と見なす傾向があり、そのゆえに支援の対象と見なしている。家庭支援に入る場合には、「正しくあるべき家族像」がなければ、成立しえない。つまり“欠損家庭”を援助するための活動と位置づけているのである。それに沿っていうなれば、一人親支援の活動は規範やモデルがあってはじめて成り立つ活動であるといえる。一人親支援を必要とする活動は、父子家庭もあるが、母子家庭が圧倒的に多く、また、母子家庭になるに至った背景はさまざまである。ドメスティック・バイオレンス（以下、DVと略す）を受けて離婚したケースも、筆者の調査した限りではかなり多い。

筆者が調査を行った一人親支援活動（以下、一人親ヘルパーと称す）の団体は、東京都郊外にある、一つのNPO法人である。そこでは一人親支援の一環として、通所の有償ボランティアの事業所を設立しており、児童相談所など、行政ではカバーできない、あるいはとりこぼしてしまう「家庭における問題」を、一人親ヘルパーの活動としてどのように改善できるかを目標として取り組んでいる。一人親ヘルパーは、行政に依頼されて派遣され、極端な言い方をすれば、支援というかたちでよその家庭に入っていく人たちである。また、一人親は父子家庭もいる

が、母子家庭が多くを占め、「母親の援助」を前提にして行われる活動である。

本稿では一人親ヘルパーのワークを対象とし、ヘルパーへの聞き取りを行った。一人親ヘルパーはリスク家庭とされている家庭において家事支援や育児支援を行う一方で、児童虐待に注目し、それに関連した支援を提供していた。本稿は、一人親ヘルパーが自らも母親であることに起因する経験知を活用して、通常のヘルパー業務を超えたところで児童虐待に対して対応を行っていること明らかにする。そして、そのワークが児童虐待に対して有効な部分とその限界を明らかにするのが本稿の目的である。

Ⅱ 先行研究

子どもの虐待被害者に関する文献は、昨今の児童虐待の増加に伴い、多く出版されている。特に、被虐待児へのケアのマニュアルなどは枚挙にいとまがない(川崎 2006, 森田 2008, 竹中, 長谷川, 朝倉, 喜多 2002)。特に本稿で関心のある性的虐待に関する代表的な文献としては、森田ゆり, Judis Herman, Russell, Diana E.H が挙げられる(Herman 2000, Russell 2002)。

児童虐待の昨今の増加をうけ、その対策として、児童福祉の観点から、まず地域における子育て支援活動を福祉活動の例として挙げてみたい。中山徹は、かつては専業主婦の家庭では保育に問題はなく、特別な社会的支援も不要であったと述べる。しかし最近では、様々な要因から保育に欠けると判断され、保育所に通っている家庭よりも、母親が孤立して家で子どもをみている家庭に、子育て困難家庭が急増していると警鐘を鳴らす。そのため、子育ての地域でサービスをする供給もある。地域でサービスを供給する場合、その供給そのものに行政が責任を負うと述べる。さらに利用者との関係でも、サービスを提供する側の責任の内容が変わる。そのため、利用者が主体者として地域や施設の運営にかかわれる、もしくはそのように促す仕組みづくりの必要性があるとする(中山 2005)。後に述べるが、本稿で扱う事例は、この必要性に応えたひとつの取り組みである。

また、家庭に問題のある子どもの保護には、保育所や学校と連携し、子どもの状態を把握しながら、家庭や保護者に対する福祉的な働きかけが重要になる。しかし、現状では保育所や学校とケースワーカーなど福祉専門職との連携がとりにくく、十分に対応できない地域の方が多いという(中山 2005)。

Ⅲ. 対象

Ⅲ-1. 調査対象

本稿では、もと一人親ヘルパーを勤めていたその事業所の設立者Eさんと、ヘルパー事業所の事務的な仕事を引き受け、ヘルパーの代表であるCさん、現在一人親ヘルパーを勤める方7名にインタビューを行うことで、一人親家庭における

児童虐待（身体的虐待，心理的虐待，ネグレクト，性的虐待）の現状を明らかにする。インタビューにおいて，補足として説明が必要だと筆者が判断した場合，〔 〕に記述した。事業所におけるボランティアの数は10名程度であり，ローテーションでそれぞれの一人親家庭にあったニーズをサポートするかたちをとっている。ヘルパーは全員女性であり，子育ての経験を持っている。また，ヘルパーの大半は一人親である。もちろん中にはそうでない人もいる。

（支援対象となる）一人親家庭は，母子家庭が多いが，父子家庭も何件がある。Eさん自身が一人親であり，その苦勞から立ち上げた事業であるため，一人親家庭の苦勞や助けが必要ながわかるのとことが述べられた。本事業所の設立者であるEさんは現在ヘルパー業務をはなれ，女性相談員¹⁹を勤めている。調査の期間は，2009年4月下旬から7月上旬までである。筆者は，一人親ヘルパーたちが集合する会に参加する許可を得て，そこでインタビューを行い，また，個別にもインタビューを了解して下さった方には，本稿の目的を理解してもらった上で，応じていただいた。プライバシーに配慮するため，名前は全て匿名とした。ヘルパーの集合する会も含め，調査に応じていただいた方は7名だが，本稿では個別に載せたインタビューにおける語りは，本稿の内容に応じて4名に限定した。

インタビューは基本的には，ヘルパー活動を通じて感じた児童虐待に関することを自由回答形式で行ったが，場合によっては質問項目に回答していただいた⁽³⁾。ヘルパーの賃金は流動的であり，日中帯は850円，夜間帯は1000～1300円である。供与は月給のかちをとる。賃金はCさんが管理しており，そのNPOにヘルパーが受け取りに来て，支払う。NPOで賃金に関係することは，ヘルパー活動だけ市に認めてられており，ひとつの「事業」として成り立っている。

Ⅲ-2. 一人親ヘルパーについて

本稿は，東京都郊外にあるNPO法人の一人親ヘルパー事業所で，実際ヘルパー事業に従事している人に，インタビュー調査を行った。このNPOは，重複になるが，現在は他の自治体で女性相談員を勤めるEさんが主導となって立ち上げたものである。Eさんは，直接のヘルパー活動は行っていないが，ヘルパー間で問題が起った時や，公的機関の介入が必要なときには，そのNPO事業所の代表として対策措置をとる役割を果たしている。したがって，ヘルパーたちがこの家庭には問題がある，と気づいたことがあると，Eさんに相談するようになっている。

ヘルパーを依頼する経緯は，まず一人親家庭になったとき，市役所から「あなたはこのような援助がうけられますよ」というしおりをもらう。そこで，当人が必要を感じたら市に申請し，ケースワーカーが入り家庭の事情を説明し，そこでヘルパー支援が必要かどうかを振り分けられ，必要だと認定された人には市からヘルパーの事業所へ依頼がくることになっている。つまり，ヘルパーを家に入れることは，一人親になった親当人が選択する事柄なのである。

ヘルパー⁽⁴⁾の仕事は主に家事支援である。この地域にはヘルパーの事業所が7箇所あるが、筆者が調査を行った事業所は、もともとEさんがこれまでにあった時間通りのヘルパー支援ではなく、例えば、お母さんがお酒を飲む時間のためにヘルパーを使ってもいい、お母さんが遊ぶ時間があってもいい、子どもが寝つき、親が帰って来るまでの育児保育をするなどの通常のヘルパー援助と異なり、時間外の支援も必要だと感じて、このNPOを設立したという。また、先にも述べたように、その事業所のヘルパーを勤める人も一人親家庭の母親が多い。そのため、その事業所のヘルパーもその考えに賛同している。したがって、筆者が調査を行ったこのNPOは、ヘルパーたちにおしなべて当事者性が強く、利用者にとっては非常に融通のきく側面をもつことがわかる⁽⁵⁾。

夜にどうしても仕事をしなければならない親が、このNPOの噂を聞きつけて、依頼することもある。また、この一人親ヘルパーのNPOは、当該地域だけではなく、隣接する地域からもヘルパー派遣の依頼があるという。それは、単にヘルパーが不足しているからではなく、このNPOの行っている特徴ある活動聞きつけて、この事業所から一人親ヘルパーを派遣して欲しいというニーズがあるからだろう。

Ⅲ-3. 児童虐待のためのヘルパー事業について

筆者が調査を行った市に隣接する市では、虐待防止法とDV防止法の成立後、子どもが産まれたときからヘルパー派遣を受けられる制度がある。それは虐待防止のためのヘルパーであり、要請があれば、赤ちゃんが産まれたときから、例えば精神疾患があって育児ができない母親、高齢出産で子どものことが全然わからない母親のいる家庭に、ヘルパーが派遣される。そこで、ヘルパーと一緒に風呂に入れるなどといった育児を教える。基本的に、そのような家庭には、日中帯には父親は働いて不在である。隣接するある市では虐待防止のために、ケースワーカー、保健士、児童心理士などが関わって手厚くフォローしていく。ゼロ歳児の定期健診や3ヶ月健診で、母親にうつ傾向がみられたり、子どもにあざがある場合には、看護師などが声をかける。

しかし、その制度は無料ではない。だが、一人親家庭ではないため、ヘルパーを要請する家庭は、一人親家庭からすると比較的経済的に裕福であるといえよう。また、そのヘルパー活動にも、筆者が調査を行った地域のヘルパー事業所からヘルパー派遣の要請がくる。経路としては市の福祉業者から連絡が入り、ケースワーカーと女性相談員とコーディネーターが、依頼を受けた家庭を調査する。そこで様子がおかしいと思った場合、ケースワーカーに情報が入り、ケースワーカーが、その家庭で話を聞くなど、虐待防止活動をする。様子がおかしいというのは、親の様子よりも子どもの様子がおかしいということが重視される。例を挙げると、子どもがぎよときよとしている、落ち着きがない、ご飯を食べない、勉強しようとしなないなど、子育ての経験があるヘルパーならすぐに子どもの異変に気

付くという。親の様子がおかしい場合にも、保健士が話を聞きに行ったり、子ども家庭支援センターに子どもを連れて遊びに行きませんか、と声をかけるなど、社会資源を利用して、何とか母親が家庭にいて育児が続けられるようなフォローをしていく活動がある。虐待が起こる前からそのような活動をするこの市は、虐待防止に関してみれば、非常に先駆的な自治体であるといえるだろう。

Ⅳ．調査結果

Ⅳ-1．発見される虐待

まず、筆者はヘルパーたちが集まっている場において聞き取り調査をおこなった。児童虐待に関して聞くと、「児童虐待」という言葉の重さからか、そのようなことは見受けられなかったということが語られた。

Aさん：児童虐待ねえ、そんなのはないですよ。そこまでひどいのはないよね。[保護者が]仕事から帰ってきて、家事して、子どもがまとわりついたりすると、かっとなってひっぱたいちゃったりするのはあるけど、児童虐待は…ないですね。

しかし、個別にヘルパーに聞き取りをすると、児童虐待を意識した言葉が出てくる。

Bさん：私が知ってるなかでは、ネグレクト？ネグレクトをみているんだけど、その訪問もたまにしかやらないんだけど、お母さんがもう出て行っちゃっていて、お父さんはまあいるんだけど、食事とかはカップラーメン、カップうどんとか。(略)で、もう部屋はね、布団とか敷きっぱなしなんです。もうほとんどごみ屋敷みたいな感じで。で、私たちが行って、台所とかきれいにするわけですよ。だけどその一、なんていうのかしら、私たちが行くと、その汚れたもの〔衣類など〕を隠すわけですよ。

Bさんは父子家庭にヘルパーに入っている人である。この虐待の発見は、家事支援で入るヘルパーの業務から外れたものであり、本来の業務とは異なることである。Bさんは一例だが、一人親ヘルパーに入って発見されるのは、ネグレクトがほとんどを占めるといえる。お母さんが忙しくて子どもに無関心であったり、またその原因としては、お母さん自身が育った環境の悪さなどが、ネグレクトに関係しているのではないかという意見もあった。Bさんの語りは一例にすぎないが、家庭に入ってその様子をみた上でヘルパーが明らかにその家庭に問題があると判断する際、具体的にはヘルパーが入ってから、主に児童に身体的虐待、ネグレクト、心理的虐待が発見されるのだが、発見の際に子どもからの虐待のSOSを受け取るのも、ヘルパーの仕事であるとヘルパーたちは語る。また虐待や虐待傾向

の対策としてヘルパーたちは、親が子どもへの対応を「問題」として向き合うよう働きかければそれは解決されると言うが、ヘルパーは業務上そこまでは立ち入れないという。しかし、ある家庭では、子ども自身からヘルパーに身体的虐待の報告があり、すぐにEさんと、ヘルパーの代表を務めるCさんにつないだという。このように、子ども自身から何でも問題だと感じることを言えるのがヘルパーであり、それに応えることも重要だという指摘もあった。

身体的虐待などは、ひどいケースは見受けられないが、あった場合には支援機関に通報し、事業所でケース会議をひらいてその家庭にどのように援助するかが決められる。そして、地域の子育て支援センターに通報して、状況を判断して児童相談所へつなぐという流れになっている。筆者が調査したヘルパーの事業所では、児童虐待が起こっている家庭では、ケース会議を開いて対策を相談しあう。また、ヘルパーが入って何か問題だと感じたときは、他のヘルパーにではなく、EさんとCさんに相談、報告をする決まりになっている。そこで、入っているヘルパーがどうしてもあの家はおかしい、と思った時には、EさんかCさんが責任者として市役所に報告に行く。そして、それを受けてケースワーカーが必要だと判断すれば家庭訪問をしたり、Eさん、Cさんらと改善のための援助の相談をして対処していくかたちをとって対応している。

これは、通常のヘルパーのワークの枠から大きくずれるものである。通常のヘルパー活動では、利用者が自立した生活を行うために援助を行い、家庭の問題には介入しないが、筆者が調査した事業所のヘルパー活動では行っている。それは、何か問題が出てきた時に、無視できない感情がヘルパー自身に働くゆえだと考えられる。そこには、自身が子育てを経験し、また地域の福祉資源にどのようにつながられるのかを知っているがゆえの、経験知と家庭における問題を察知する想像力が存在するといえる。一般的なヘルパー活動でも、家に入れば何か問題があれば気付くはずである。しかし、それはヘルパーの業務から外れるため、基本的には問題化されない。問題を問題化するのが、本ヘルパー活動の大きな特徴であるといえよう。

Ⅳ-2. 発見されない虐待

インタビューの中で、児童虐待、とりわけ身体的虐待やネグレクトに関する語りは多くみられ、心理的虐待に関しても言及されていたが、性的虐待だけは、それ自体を否定する語りが多くみられた。具体的に見てみたい。

Bさん：まあ、性的にね、で、そういうことみたいで、で、若いヘルパーをつけてくれとか言うんですって。問題あったら大変よね。で、6年の女の子が体格良いのよ、でもまだ生理がないみたいなんだけど、でも生理になってもね、まあ、周りに誰も何か教えてくれる人もいないし、まあ、そこらへんがね、性的対象になっていると思いますよ。みんな思いますよ。(略)それでねえ、お母さんが来

ると、お父さんとられちゃうから、お母さん来なくていいって。

性的虐待に関しては、Bさんだけが上のように語ったのみであり、ヘルパーのグループにおいては、その家庭に性的虐待があるとみなさなれていない。その父親が知的に問題があるため、若いヘルパーを望んでいるだけで、自分の子どもを性的対象とはみなさないという意見がヘルパーたちの大半を占める。しかし、その家庭に虐待の問題があると感じたBさんはEさんに、虐待があったことを報告した。その報告に関するEさんの意見と対応を聞いたところ、次のように応えた。

Eさん：そうねーまあ虐待はあるかも知れないけど、性的虐待はないでしょ。〔Bさんの訪問する家庭の父親は〕逆に子どもを子どもとしか思わない人だから。女の子でも。性の対象としてみるほど、お父さんの知能が発達してない。性的対象にするような人ってのは傾向があるんですよ。あの一、なんていうの、もともと嗜癖があるのよ、嗜癖が。

筆者：それは見てわかるんですか？

Eさん：わかる。なんとなくね。それは私が今はヘルパーじゃなく相談員もやってるから。そういう相談多いからね。女性相談てね、そんなに割合多くはないけど、必ず性的虐待の報告も来るからね。

筆者：じゃ、ヘルパーが入るような家庭では、そういうことは起きない？

Eさん：入れない、そういうことする人は他人を。他人を家なんかには絶対入れない。性的虐待をする人は、後ろめたいとかそういう気持ちを持つてるから絶対表に出さない。それか「嗜癖」。自分で止められない。性的な嗜癖って〔保護者が加害者に〕なっていくときに、それもたぶん個人差のなかであると思うんだよ、親から何かを受けていたとか、それは性的虐待じゃなくてもね。何らかの虐待を受けていたとかね。何かその経緯っていうのはあると思う。

筆者：虐待は連鎖するってことですか？

Eさん：うん、まあ単純に連鎖はしないと思うけど、ともかく止めてくれるものがなかったってわけだね、誰も止めなかった。だからそういう環境に生きる、身を置くことができなかつたとか、そういう関係性の中でなりがちだと思うのよ。公然化されることのない嗜癖、アルコール依存だったりすればさ、すぐわかるし、隠しようがないわけだけど、性的嗜癖は隠されちゃうからね。

語りから得られたこととして、性的虐待と他の虐待の違いは、加害者である保護者の意識の違いにあるとヘルパーは認識していることが推察できる。保護者自身がそれぞれ「問題」を抱えた被害者だと思っているから、平気でヘルパーを頼めるとヘルパーたちはいう。身体的な暴力（身体的虐待）は、あざがつくような暴力がふるわれており、いじわるを言う、躰を厳しくする、これは教育だとえん

えん説教をするなどという心理的虐待は、本人の中で正当化されると説明されると語られた。言うことを聞かせる簇であったり、大人になったとき困るからなど、保護者の中に言い訳があるというのである。ネグレクトも、自分は疲れてくたくただといった、保護者にとって正当化できるような理由を持っているからやってしまうことが考えられるとヘルパーには認識されている。これは、ヘルパー自身が母親の経験があるから解釈することなのであろう。しかし、インタビューでも明らかになったように、性的虐待の場合は、加害者の「嗜癖」による行為であるとの認識がされている。この「嗜癖」という言葉が示唆するものは、性的虐待は、加害者がどこか自分は悪いことをしているという意識が働いていることEさんははじめ、ヘルパーたちが推察していることである。

ヘルパーたちがもつ認識のなかでも、ネグレクトや身体的虐待は、ヘルパー支援に入ることで、ご飯を食べさせたり、保護者が子どもに暴力をふるっているときにそれを止めさせるなどの対応ができるし、またそうしているという。しかし性的虐待に関しては、まずそのことが起こっているという自体への想像がしにくく、また問題を問題化することが有効な解決につながると思われていないからであると考えられる。つまり、解決のために動くことが、被害児童を傷つけることになったり、その家庭そのものを崩壊させてしまう可能性もあることは否定できないことと捉えられているのである。また解決の前に、性的虐待は証拠自体がつかみにくい、つまり目にみえず発見されないという点もある。

現在は女性相談員であるEさんは、今は立場が異なる関係上、性的虐待に遭遇する頻度は、ヘルパーたちとは異なる。むしろ、他の虐待ではなく、性的虐待やDVなどに性に関わることを相談として受けているため、性的虐待に関しても被害を受けた子どもを、その子どもにとって何が最善かを考えることを優先している。

V. 考察

これまでに、現在定義されている虐待（ネグレクト、身体的虐待、心理的虐待と性的虐待）をみてきたが、ヘルパーが入ることによって発見された以上、虐待の種類によっては子どもの状況はヘルパーによってある程度は改善されることが明らかになった。つまり、ヘルパーが入ることによって、これまでの家庭の雰囲気や、付き合い方も変わるようになることも多々ある。ヘルパーの仕事は、家事援助一つにしても、「ここまでは仕事としてやるけれど、それ以外のことはやってはいけない」という原則がある。筆者の調査した事業所は原則にとらわれない特異な性格を持っているといえよう。その特異な性格とは、母親であり、一人親であるという当事者性から支援をする点にある。ヘルパーの発見により児童虐待があるかないかを判断できるという点で当ヘルパー活動は児童虐待の対策の観点からみれば、非常に意義があるものである。特に、ネグレクト、身体的虐待、心理的虐待の発見にも有効であるといえよう。お母さんが遊びに行ったり、お酒

を飲む時間があってもいい、と先にも述べたようにヘルパーは母親への理解はあるといえる。それは、ヘルパーたちが自分の子育ての経験から、共感されたものであると考えられる。ヘルパーが入ることによって、母親の代わりに家事援助をするということは、本来ならば「母親がやるべきことである」という前提がヘルパーたちに持たれており、ヘルパーとして援助に入る理由はわかりながらも、本当はこうなって欲しいといったあるべき母親像は共有されているといえる。

虐待に関しては、ネグレクトや身体的虐待、心理的虐待は、ヘルパーによって比較的可視化されやすいといえる。一方で、不可視化されるものも明らかになった。それは性的虐待の存在である。それに関してはその発見はヘルパー間によって見解の相違があり、したがって、性的虐待があったとしても、その状況は改善されにくい。ネグレクトも、ヘルパーが支援に入っているうちはいいが、いなくなると親が子どもを叱ったり、また虐待を繰り返してしまうことが、事例をみると多数ある。

性的虐待に関しては、先にも述べたように、ヘルパーが入ってもその事実を認めたくない、関わりたくない、見たくないという意識を持っている面は無視できない。Bさんを除いて、ヘルパーの間で性的なことには関わりたくないという意識から、虐待をヘルパーにうったえた本人の思い込みじゃないか、という語りも聞かれ、その時にはヘルパーの仕事の原則が利用される。つまり、ここからは自分の仕事ではないから、とその場から離れることである。性的虐待を扱わないもう一つの原因として、その実態があったとしても、ヘルパーの業務を遂行する上で、性的虐待を看過することが必要であると考えられる。なぜならば、それへの介入は特に本来のヘルパー業務から外れたものとなり、解決する場合、ヘルパー業務だけではなく多機関と何度もやりとりをし、被害者からの聞き取りなどの調査が必要となるからである。それがヘルパー、事業所、被害者にとっても負担であり、ヘルパーにとっては、原則としてのヘルパーの業務ができなくなり、時間的にも心理的にも負担となるからだと考えられる。

またBさんの語りにもみられるように、虐待があったとしても、CさんやEさんに伝えるまでの間にも、それにどう関わるか、あえて問題として言うべきかというヘルパー自身の中での葛藤があることが考えられる。また、女性相談員であるEさんの、「嗜癖」という言葉を使うことにも注意したい。性的虐待は加害者に「嗜癖」があるという特殊な状況で起こるものであり、通常の家庭にはまずないと考えられていることがうかがえる。性的虐待は加害者が病的という特殊な状況下でおこるものであり、「嗜癖」がない限りはめったなことでは起こらないと認識されており、その点において他の虐待と比べると表面化しないものであるといえるだろう。

性的虐待は、それ自体を意識したくない、見たくないといった感情がヘルパーに持たれていることが聞き取りから明らかになった。それは、発見してもどうしたら良いのかわからないということに起因していると考えられる。性的虐待は通

常男性からの加害が想定されている。しかし、ヘルパーは母親であり女性であり、性的虐待はしたこともされたこともないため、そういった行動を想像しにくいということが考えられる。他の虐待に関しては、自分自身母親としてやってしまった可能性もあり、想像がつくため、気づきやすいため、支援の対象となる。しかし、性的虐待に関する問題は、経験知では捉えられない問題であるため、なるべく触れたくない、見たくないという意識が持たれているのが現状である。

質問を変え、虐待全般に関してそれへの対応と解決策を筆者が問うた時、「人と違うことを隠したり、オープンにすれば良いんじゃないか。みんなが理解して、そういうことを自然になくしていくことを身につけることが大切なのではないか。」という意見があったが、現実には、被害者自身が自らの被害を明るみに出すことは非常に困難が伴う。明るみに出した場合、親子関係の問題のみならず、先にも述べたように、解決には多機関の協力が必要となるため、その過程で被害者児童のいる家庭の情報がどこからもれるかわからないため、プライバシーの問題も出てくる。プライバシーを主張されると、他人の家庭に入るヘルパーであっても、業務と指定されていること以外は、よほどのことがない限り、手を差し伸べることは難しくなるだろう。性的なことであればなおさら、その実態の把握自体も困難であると推測できる。また、虐待に介入する前にプライバシーが大きな壁となっていることも、今回の調査から明らかになったことといえよう。

Ⅵ. 結論

今回の調査で、当ヘルパー事業の特徴として、家庭の問題、この場合には児童虐待に介入することができることが明らかになった。一方で、介入する前に、発見できない虐待もあり、そこにヘルパーのワークの限界があると考えられる。性的虐待を考えた時、その認識はまだ薄いといえる。先にも述べたように、あったとしても、あるかも知れないという疑念を抱いても、それをヘルパー間でも問題化するのには明らかに目に付くものではないため困難である。今回は一人親ヘルパーを主な対象に絞ったが、虐待の中でも性的虐待に関しては、他者の性的なものへの嫌悪感が先立っているといえる。それは、この事業所の特徴である当事者性から出てくるものであるといえよう。母親から性的虐待を受ける子も少数ながらいるが、大半は男性からである。そのため、当事者性の強いヘルパーたちには想像しにくく、「性的虐待という問題が存在する」ということは認識しながらも、日常において起こることは肯定できないということも考えられる。また、母親が性的虐待の加害者となることも考えられるが、男性からの加害という考えが主流なため、ヘルパーたちの間では、あくまで母親の立場に立つというジェンダー規範がそこにはあるといえる。

虐待が発見される場合、児童虐待やスクール・セクシュアル・ハラスメント⁽⁵⁾を受けた子どもが、自身からヘルパーや女性相談員に相談がなされることもある

ことを先に述べた。しかし、現在の児童虐待防止法では保護者もしくは養育者からなされたもののみが、虐待と捉えられている。その定義自体を再考する必要があるだろう。初めの章で述べたとおり、性的虐待は暗数が非常に高いものである。被害をうったえようとしても、性的なことを被害を受けた子どもが自己申告しなければならぬ現状は、当人に非常に負担を強いるということが考えられる。

一人親ヘルパーは他人の家に入っていける存在である。家庭に入りながらも、表面化しない虐待があることは明らかになった。それを踏まえて、今後、ヘルパーなど第三者が子どもをみているという安心感が持てるような状況を活かし、被害者が誰かに相談したり、告発できるような環境を作っていく必要があるだろう。そのことを検討することを、今後の課題としたい。

注

- (1) 厚生労働省、児童相談所における児童虐待相談対応件数より

http://www.mhlw.go.jp/houdou/2007/07/h_0710-3.html

- (2) 女性相談員は、もとは婦人相談員であり、女性の性をめぐって生じる問題に取り組んできた人たちである。特に、売春をしていた女性をとりまく問題の相談のり、対応に取り組んできた（兼松 1987、兼松、福島、稲穂井 1989）。婦人相談員は、赤線が廃止されたときに、売春で生計を立てており、様々な問題、特に性にまつわる問題を抱えた人たちの相談のり、保護する役割を果たしてきた。現在は、婦人相談員ではなく、女性相談員と名を変えており、Eさんが就いているのが、この女性相談員である。そこには、主にDVを受けた女性が訪れるという。Eさんのいる婦人保護施設はDVによって保護された人がたくさんいる。DV防止法ができたものの、DVを受けた女性のためのシェルターは全国でも数が少ない。したがって、現在は婦人保護事業のときにつくられた婦人保護施設が替わってその役割を果たしているといえよう。女性相談にやってくる人は、婦人相談員への系譜をたどり、性にまつわる問題を抱えてやってくる人が多い。それは、婦人相談の系譜を組んでいるといえよう。相談の項目には、虐待、DV、児童性的虐待や強要がある。後にも書くが、親密な家族内における性的嗜好は隠されやすく、表面化しにくい。Eさんたちが行っているのは、こういう相談を受け付けていますよ、と各地にチラシをおいたりであるとか、ケースワーカーと連携することで、問題を抱えてくる女性に対応することである。そして、先にも述べたように婦人保護施設は、DVのシェルター代わりとなっているのが現状である。女性相談員は以上のような相談を受け、それに対応する役割をになっている。女性相談員は、行政が雇用するものであり、活動は上記のように様々ではあるが、窓口は行政となっている。

- (3) 質問項目は、

- ① ヘルパーとして家庭に入り、なにを見たとき、あなたは問題だと思いますか。
- ② 問題を発見したときにどう思いますか。

- ③ 仲間の間でどのようなやりとりを経て公的機関につなげるのですか、あるいはつなげないのですか。
- ④ ソーシャルワーカー(この場合は一人親ヘルパー)がなぜ、性的虐待やDVなどを問題化できないのですか。その場合、自己規制するのはなぜですか。の4項目である。
- (4) 家庭訪問ヘルパーのことであり、主な仕事は家事援助である。具体的には、料理、子どもの入浴、子どもを決まった時間に寝かしつけるなどがある。
- (5) 学校において、教師が生徒にわいせつなことをすること。

文献

- Diana.E.Russel, 2002,『シークレット・トラウマ——少女・女性の人生と近親姦』ヘルスワーク協会。
- 古川孝順, 1991,『児童福祉改革——その方向と課題——』誠信書房。
- 古川孝順, 2008,『福祉ってなんだ』岩波ジュニア新書。
- 古川孝順, 田澤あけみ編, 2008,『現代の児童福祉』有斐閣。
- 井上真理子, 2005,『ファミリー・バイオレンス——子ども虐待の発生のメカニズム——』見洋書房。
- Judith Lewis Herman, 1996,『心的外傷と回復』みすず書房。
- 兼松左知子・福島瑞穂・岩穂井編, 1989,『[女・子供]の視点から少年事件を考える』朝日新聞社。
- 兼松左知子, 1997,『閉じられた履歴書 新宿・性を売る女たちの30年』朝日新聞社。
- 川崎二三彦, 2006,『児童虐待——現場からの提言』岩波書店。
- 森田ゆり, 2008,『子どもへの性的虐待』岩波書店。
- 中山徹, 2005,『子育て支援システムと保育所・幼稚園・学童保育』かもがわ出版。
- 日本子ども家庭総合研究所編, 2001,『子ども虐待対応の手引き』有斐閣。
- 上野加代子, 小木曾宏, 鈴木崇之, 野村知二編,『児童虐待時代の福祉臨床学——子ども家庭福祉のフィールドワーク——』明石書店。
- 全国児童養護問題編, 2002,『子ども虐待と援助——児童福祉施設・児童相談所のとりくみ——』ミネルヴァ書房。